

第Ⅲ部

西アジアを越えて

7. バスマチ運動におけるエンヴェル・パシャ

帯谷 知可*

キーワード: バスマチ運動、エンヴェル・パシャ、ロシア領トルキスタン、ロシア革命、イスラーム

Key Words: the Basmachi movement, Enver Pasha, Russian Turkistan, Russian Revolution, Islam

- | | |
|----------------------|--------------------|
| 1. はじめに | 3. カリフの娘婿にしてイスラーム軍 |
| 2. エンヴェル・パシャ、トルキスタンへ | 司令官エンヴェル・パシャ |
| | 4. おわりに |

1. はじめに

西アジアという地域の社会がいくつもの文明・文化が積み重なった重層的な構造をもっているとして、その各層は必ずしも西アジアだけに限定されて存在するものではないだろう。それぞれが西アジアを越えて近接地域や、ひいてはかなり広い領域にわたって張り出していて、複数の地域を横断する層があったり、あるいは逆に複数の地域がある層を共有している、というイメージをもつことができるだろう。

筆者はここでエンヴェル・パシャ Enver Paşa (1881-1922) という人物とバスマチ運動¹⁾との関わりを取り上げる。オスマン朝末期、青年トルコ党革命の立役者の一人であり、「統一進歩団」の三頭政治の一角を担い、オスマン朝の陸軍大臣にまでのぼりつめたエンヴェル・パシャは、第一次大戦における戦争責任追及の手を逃れるため祖国から脱出せざるをえなくなり、紆余曲折を経た後に中央アジア（トルキスタン）へとたどり着いた。そして、ロシア革命後の内戦において中央アジア現地住民の反ソヴィエト武力抵抗運動「バスマチ運動」に身を投じて、結局その中で命を落とすに至った。こうしたいきさつを考える時、エンヴェル・パシャは上に述べたような、「張り出した

1) ウズベク語で Bosmachilar harakati、ロシア語では Basmachestvo または Basmacheskoe dvizhenie という。「バスマチ bismachi」とは「襲撃者、攻撃者」の意味で、もともとはロシア帝政下の中央アジアでロシア支配に抵抗して襲撃行動を行った地元民たちに対して使われた言葉だといわれているが、「バスマチ運動」は一般にはロシア革命後の中央アジアの反ソヴィエト武力抵抗運動の総称である。叛徒たちは自らをコルバシ qo'rboshi と呼んだ。最近のウズベキスタンの歴史学会では「バスマチ」の代わりに「イスティクロールチ istiqololchi」（独立主義者）という呼称を使い、バスマチ運動を Istiqolchilik harakati（独立運動）と称するべきだという主張がある。

* 国立民族学博物館地域研究企画交流センター

層」をつたって延々と移動していったように思えるのである。

エンヴェル・パシャについては、主にトルコに存在する一次史料に依拠して山内昌之氏によって近年一連の研究が発表されており、その冒険と野心に満ちた後半生が明らかにされてきた [Yamauchi 1991; 山内 1995b; 1999]²⁾。イスタンブルから脱出した後、無節操ともいえるほど各方面で種々の画策をしながら、ベルリンからモスクワへ、そして1920年のバクー東方諸民族大会に出席した後、再びモスクワとベルリンを往復、いったんはアナトリアに入るがケマル・パシャに敗北し、最終的にはエンヴェルは、東方への革命輸出の前哨としてどうしても中央アジアをその版図にとどめておく必要のあったボリシェヴィキ政権によって、中央アジアの国内戦鎮静化、すなわちすでに生じていたバスマチ運動の指導者たちの説得という任務を帯びて、トルキスタンへ派遣される。しかしトルキスタンに到着した後エンヴェル・パシャはバスマチの側に寝返ってしまうのである。

筆者自身の主たる関心は、エンヴェル・パシャその人の思想と行動というよりはむしろ、バスマチ運動の生成および展開過程の解明という観点から、彼がいかなる経緯を経てバスマチ運動に参画し、何をバスマチ運動に望んだのか、またバスマチの叛徒たちは彼に何を望んだのかということにある。ここではその足掛かりとして、いくつかの情報を総合して、エンヴェル・パシャのトルキスタン到着以降の行動・活動を整理し、山内氏およびシェヴケト・アイデミル Şevket Aydemir、アブドゥッラ・バイスン Abdullah R. Baysun、アリー・バーデムジ Ali Bâdemci によって取り上げられているエンヴェル・パシャ関連の書簡³⁾のうち、バスマチ運動に関係するものからいくつかをピックアップして紹介しつつ、これらの課題の答えを探る試みをしてみようと思う。

2. エンヴェル・パシャ、トルキスタンへ

エンヴェル・パシャがハジ・サミ Hacı Sami らと共にバトゥーミからチフリス（現

2) トルコで出版されたものに Yamauchi [1995a] がある。

3) 現代トルコ語によるエンヴェル・パシャの書簡集 Yamauchi [1991] の他に、Aydemir [1972]、Bâdemci [1975]、Baysun [1943] など、トルコで出版された伝記・回顧録等にエンヴェル・パシャ関連の書簡が散見される。アイデミルは長大なエンヴェル・パシャの伝記の中で、バイスンは回顧録の中でエンヴェル関係の書簡数通の原本のコピーを現代トルコ語訳を付して掲載している。またフェルガナでバスマチ運動を指導したシル・ムハンマド・ベク、ヌル・ムハンマド・ベク兄弟の回顧録を編纂したバーデムジはやはりエンヴェル・パシャ関連の手紙の現代トルコ語訳を紹介している。それらは山内氏によってトルコ歴史協会等で検索され、現代トルコ語に転写、出版された一連の書簡 [Yamauchi 1991] とは基本的に重複しない。それらを年代順に整理したものを本稿末尾にあげておく。

トビリシ)、バクー、クラスノヴォツク (現トルクメンバシ)、アシュハバード (現アシガバート)、メルヴ、パイラムアリ、チャルジョウを経て [Baysun 1943: 53]、ブハラに到着したのは1921年10月半ばのことである。10月16日にはエンヴェルはブハラからベルリンの弟キャミル・ベイにブハラ到着を知らせる手紙を書いている [Yamauchi 1991: No. 136]。汎トルコ主義に裏打ちされたイスラーム国際主義によってイスラーム世界の解放の主人公たろうとする野心的構想から、トルキスタンという地域への関心は1920年頃からもっていたようだが [山内 1999: 126-127]、彼がこの時点で、ケマル・パシャ支持に傾いて不一致が見え始めていたソヴィエト政権の意向に心底から従ったとは考えにくく、トルキスタンへ来るためにボリシェヴィキ側の派遣の提案を利用したと見るのが妥当だろう。彼の到来は、一説には特にブラハ人民革命を成就させたばかりのジャディード⁴⁾たちからたいへんな熱狂をもって受け入れられたというが [Baysun 1943: 53]、それはもちろん、エンヴェルがオスマン朝スルタン制に終止符を打った青年トルコ党革命の英雄であったことと、ジャディードたちが青年トルコ党に倣って「青年ブハラ人」を名乗り、やがてソヴィエトとの協力のもとであったとはいえ1920年にブハラのアミール体制に終止符を打ったことを重ねあわせての熱狂であったろう。ソヴィエト側の監視の目をかいくぐって様々な人物がエンヴェルを訪れたらしい。そして、ブハラ到着から半月もたたぬうちに、エンヴェルはいくばくかの者ととともに狩りに出かけるふりをしてブハラ市内から脱出し、東ブハラの山岳地帯 (現在のタジキスタンの領域) へと姿を消したのであった。

その当時ブハラは、1917年のロシア革命の後もロシア帝政時代以来の保護国の地位保持を認められていたブハラ・ハーン国が1920年ついに赤軍によって打倒され、国内戦のさなかにあった。赤軍の力を借りてジャディードたちを中心として成立した新生ブハラ・ソヴィエト政権 (ブハラ人民ソヴィエト共和国、1920-1924年) は、各地で同時発生的に生じていた武力的抵抗、すなわちバスマチ運動への対処に苦慮していたのである。最後のブハラ・ハーン国の支配者 (アミール) であったサイード・アーリム・ハーン Sayid Alimkhan (1881-1944) はその復権をかけて「ジハード」として反ソヴィエト闘争を組織し、自らはアフガニスタンに逃れてブハラを窺っていた。彼に従う軍団もまたバスマチの名で呼ばれ、主に東ブハラの山岳地帯を本拠にして、アフガニスタンにいるアミールと連絡を取りつつ活動していた。ジャディードたちが主張し

4) 19世紀後半からロシア帝国内ムスリム地域に広まった、イスラーム社会改革運動 (ジャディードイズム) の担い手たちのこと。ブハラはその主要な舞台のひとつであり、ジャディードはアミール体制の変革さらには廃止を求めた。

たようにサイド・アーリム・ハーンの治世のもとでブハラ社会は停滞する一方であったとはいえ、一部にはこのアミールを盲目的に信奉し、これに従う人々もいたのである。

一方、ブハラ人民ソヴィエト共和国の初代大統領オスマン・ホジャ Osman Khojā (1878-1968) は1921年の秋にはソヴィエトとの協力体制に見切りをつけて出奔し、やはり東ブハラからドゥシャンベ方面においてバスマチの側に転じていた。エンヴェルのブハラ到来を知ったオスマン・ホジャはただちに人づてに手紙を託し、エンヴェルに自分に会いに来よう求めた [Baysun 1943: 54]。エンヴェルがブハラを後にしたのはこの直後のことでもあったらしい。エンヴェルはやや後にオスマン・ホジャに宛てて、「近々必ずお目にかかる」と手紙を書いている [Baysun 1943: 56-57]。

また、かつてロシア帝国領においてバシュキールの民族運動指導者であったアフメド・ゼキ・ヴェリディ Ahmed Zeki Velidi (ロシア名ヴァリドフ Validov、のちのトガン Togan, 1890-1970) はボリシェヴィキ政権と相容れず、トルキスタンに到来して「トルキスタン民族同盟 Türkistan Millî Birliği」なる秘密結社を組織し、地下政治活動を指揮していた。反ソヴィエトの立場にある様々なグループのみならず、すでに中央アジアのソヴィエト政権の中核で活動していた地元出身の指導者たちのうち志ある者とも秘密裡に連絡を取りながら、トルキスタン民族政府の樹立をめざしていたのであった。

トガンはその回想の中でエンヴェルについても言及している [Togan 1969: 384-407]。彼はエンヴェルの求めに応じて1921年10月24日⁵⁾ ブハラ市外にあったアフガニスタン大使館で密かにエンヴェルと会談した。トガンの言葉によれば、この時エンヴェルは反ソヴィエトに転じたとはいえ、まだ自らの態度と進路を決めかねていた。トガンはトルキスタンのためにできることは何かと問うエンヴェルに対し、選択肢は二つ、第一は直接バスマチの隊列に加わることで、第二はアフガニスタンへ行って、インド解放問題には従事せずに、アフガニスタンからトルキスタンの運動に側面援助を行うことであるが、前者のほうはあまり望ましくないと述べた。その理由は、かつて第一次大戦においてロシアの敵として国際舞台に登場したエンヴェルがバスマチに加わることで、反ボリシェヴィキという一致点によって協力関係を期待できるはずの白系ロシア人が反発し、ひいては赤軍と団結してしまうかもしれないこと、青年トルコ党を模範としたジャディードたちと対立するブハラ・アミールとその一派は当然エンヴェルを受け入れず敵対する可能性が大きいことであった。それよりはアフガニスタ

5) トガンの回顧録によれば日付は12月23日となっているが、山内氏の指摘にもある通り [山内 1999: 432]、トガンの別の著作では10月24日となっている。前後関係から考えても12月というのは誤りであろう。

ンへ行って直接ブハラ・アミールを説得する役目を担ってその協力をとりつけ、アミール経由でアフガニスタンを通じて諸外国からいろいろな形での援助が得られるよう働きかけてくれたほうが双方にとってリスクが少なく、また有益である、というのがトガンの意見であった。

もとよりトガンはエンヴェルのトルキスタン到来を好ましく思っていなかったようだが、それはトルキスタンにおける自分たちの闘争をあくまでロシアの国内問題にとどめておくべきだという活動方針が、「イスラミントレン」や「回教革団連」の結成、そしてイスラーム国際革命を志向するようなエンヴェルの夢想的な大構想〔山内 1999: 267-298〕とは一致するべくもなく、それまでにトルキスタンで築いて来た秘密工作の成果が混乱させられる、また連合国と対立する立場のエンヴェルの介入によって、連合国側（特にイギリス）から期待できるはずの援助が得られなくなり、ひいてはトガンらの運動そのものが頓挫してしまう可能性があるからだった。イスラーム諸民族とテュルクとの一体性を望まないのか、というエンヴェルの問いに対し、トガンは「この土地のテュルクたちはもっぱら自分たちの懸案のみに多忙であり、テュルクの政治的統一の問題については一度も聞いたこともないのが常である…（中略）…ここでは誰もがトルキスタン主義者なのだ」と答えている〔Togan 1969: 388〕。しかし、結局エンヴェルはトガンの勧めには従わなかった。

一方、1921年11月半ば過ぎに東部ブハラへ入ったエンヴェルは、ブハラ・アミールに忠誠篤く、東ブハラで大きな権威をもっていたロカイ族の長、イブラヒム・ベク Ibrahimbek (1889-1932) とその一党に対峙することになる。ここでエンヴェルがいかに関わり込まれるかはまったくの賭けといってもよかった。エンヴェルら一行は武器弾薬一切を取り上げられ、慇懃無礼に村々を連れまわされるという、半ば拘束状態に3ヶ月ほど置かれた。その後、その状態を解除されたエンヴェルは3千人ほどを配下として獲得し、本格的な反ソヴィエト闘争を開始、それ以降バスマチの一指導者として主として東ブハラ方面でソヴィエト政権に対する武力抵抗運動を展開することになった。さしあたってのエンヴェルの構想は、トガンとの協力も念頭に置きながら、みずからのイニシアティブによって、東ブハラで新ブハラ政府を作り、さらにサマルカンド以东で赤軍に支配されていない地域の住民と協力して独立トルキスタン政府を広域的に作り出すことにあった〔山内 1999: 512〕。エンヴェルの参加によって中央アジアにおける国内戦は火に油を注がれた状態となったのである。

それにしても不思議なのはトルキスタンについて必ずしも十分な知識や理解もなく〔山内 1999: 121, 445〕、初めてトルキスタンの地を踏んだエンヴェル・パシャが、比較

的短期間のうちに東ブハラで信用と権威を獲得しえたことである。かねてからアフガニスタンでインド問題に従事して軍事顧問を務めていたかつてのエンヴェルの同胞ジェマル・パシャ Cemal Paşa (1872-1922) がアフガニスタンにいたブハラ・アミールに圧力をかけ、アミールが配下のバスマチたちにエンヴェルに従うことを指示したという可能性は十分考えられる。またトガンによる各方面への口添えも効力を発揮したのだろう。

エンヴェル・パシャが獲得していた名声、あるいは肯定的な意味合いのものにせよ否定的な意味合いのものにせよ、彼の知名度がトルキスタンでどの程度のものであったのかを推し量るのは難しい。しかし、エンヴェル・パシャその人についての名声はさておくとしても、当時のトルキスタンにおけるオスマン朝とそのスルタン・カリフに対するやや曖昧模糊とした、しかし絶対的な「イメージ」のようなものが、トルキスタンにおけるエンヴェルへの支持にある程度作用していたということはできるのではないだろうか。

バスマチ運動においては、すでに触れたようにブハラ・アミールがソヴィエト政権との闘争をジハードとして宣言していた。これに加えて、フェルガナ地方でこの運動を展開した者たちの中には、自分たちの戦闘はオスマン朝カリフの第一次世界大戦におけるジハード宣言に呼応したものである、という認識があったと伝えられている。帝政ロシア支配に抵抗していたフェルガナ地方出身者たちが流刑先のシベリアで、大戦の捕虜としてそこに送られて来ていたオスマン朝の兵士たちに感化され、やがてロシア革命後の恩赦によって故郷に戻った後に、ジハードのためムジャーヒド（ジハード戦士）を募り始め、バスマチの叛徒ともなったというのである。バスマチの指導者の中にはオスマン朝の軍服を摸したものを身につけるものもあったという [Bâdemci 1975: 209-210]。

再びトガンを引用すると、「トルキスタンでは庶民はただオスマン朝のカリフ、すなわちトルコのスルタンを知っているにすぎない。トルコのトルコ人たちがトルコ語を話していることにも気づかずにいる。知識人たちはこれを知っているが、我々の文化の一体性については情報をもたずにいる。」 [Togan 1969: 388]。

当時トルキスタンの大部分の人々にとって、革命を経験したとはいえ、イスラームはただちにその影響力を失ったわけではなく、一部の人々にとってはイスラーム的な権威はある種絶対的なものであったようだ。たとえそれが、外から評価した場合に中央アジア固有の色彩を帯びたものであったとしても、こうした人々はムスリムとしての自己意識を持ち、自分たちはイスラームの大義に従っていると信じていた。トルキ

スタンに帝政ロシアによる征服からおよそ半世紀を経てロシア革命の波にさらされ、様々な価値観と思惑が錯綜し、混乱を極めた時代を経験している最中だった。そしてまた、めまぐるしく変化する世界情勢についての情報はタイムラグを伴って、しかも場合によっては必ずしも正確とはいえない形でこの地にもたらされていたかもしれない。エンヴェルはこうした状況をめざとく見抜いたのであろうか、バスマチ運動の中では、オスマン朝末期のスルタン・アブデュルハミト2世を退位に追い込んだ青年トルコ党革命の立て役者、「統一進歩団」3巨頭の一人としてではなく、しばしば「カリフの娘婿 Dâmâd-i Halife'tül Müslimîn」⁶⁾と自らをアピールする。言い換えれば、カリフに連なる血筋という、イスラーム世界の権威者としての自分を前面に押し出していたのである。

3. カリフの娘婿にしてイスラーム軍司令官エンヴェル・パシヤ

エンヴェル・パシヤが現タジキスタン領内ドゥシャンベの北東チェガン・テベ⁷⁾において戦死したのは1922年8月のはじめであるから、彼がトルキスタンで過ごしたのは1年にも満たない短い期間であった。その間、エンヴェルは現ウズベキスタン領のブハラから現タジキスタン領の東ブハラにかけての地域において、書簡等から地名を確認できる限りおおよそ以下のように移動し、居場所を移していった。

1921. 10半ば	ブハラ到着	1921. 12-1922. 1	ドゥシャンベ
1921. 10. 28	東ブハラへ向けて出発		(レッテベンド、ラハトウ、ムイン)
1921. 11. 9	カルガバザル (カラウルバザル)	1922. 1-2	セクセンテベ
1921. 11. 10	キルテシヒル→バイラムジ (バルダクチ)	1922. 2-3	ブルハキヤン (バイスン近郊)
1921. 11. 12	イエニ・マザル	1922. 3. 10	ホシュブラク
1921. 11. 13	ライラク	1922. 3-6?	カーフィルン (バイスン近郊)
1921. 11. 14	コシヤン	1922. 6. 15	カーフィルンより敗走
1921. 11. 19	アク・ブラク		(スルハンダリヤ渡河→カッタ・バシ)
1921. 11. 20	バシュチャルダク	1922. 6. 16	バイビチャ
1921. 11. 23?25?	カフィルニハン渡河	1922. 7	ドゥシャンベ→フェイザバード
1921. 11. 23-24	チリ・ギョル	1922. 7. 24	サトゥルムシュ
1921. 11. 24-25	クルガン・チュベ	1922. 7. 31	ベルジヴァン
1921. 11. 30	カラメンディ	1922. 8	アビデレ
	(タシュ→イフサニエ→オルタユズ)	1922. 8. 4? 5?	チェガン・テベにおいて戦死
1921. 12. 1	ギョクタシュ		

6) エンヴェルの妻ナジエ内親王は正確にはオスマン朝スルタン=カリフの弟の娘である。

7) エンヴェル・パシヤ最期の地については、ベルジヴァン、あるいはアビデレとされる場合が多いがいずれも間違いというわけではない。ベルジヴァンの近郊にあるアビデレ、さらにその近郊にあるチェガン・テベということである。

ブハラを脱出してからの数ヶ月間はエンヴェルは実にまめに反ソヴィエト陣営の指導的人物たちに手紙を書いたり、実際に面会したりした。これは、この地で受け入れられるための必死の工作であり、時には命がけの賭けでもあったかもしれない。例えば、オスマン・ホジャやトガンの他にエンヴェルが連絡を取り合ったのは、アフガニスタンにいたブハラ・アミール、アフガニスタン国王アマヌッラー Amīr Amān Allāh (1892-1970)、フェルガナ地方のバスマチ運動を率いていたシル・ムハンマド・ベク Shermuhāmmādbek (1894?-1970) (通称シルマド・ベク Shermādbek あるいはクルシルマト Kurshimat) などである。

エンヴェルは自分のいる場所をしばしば「本営 karargāh」と称し、任命状を発行して部隊司令官を任命し、かなり頻繁に各方面に宛てて手紙を書いた。以下に、あくまで試訳であることをお断りしなければならないが、それらの一部を紹介してみよう。なお、(Y-No.) は山内氏の著作 [Yamauchi 1991] における文書整理ナンバーを、(A-p.) はアイデミル [Aydemir 1972] の著作における掲載ページを、(Bād-p.) はバーデムジの著作 [Bādemci 1975] における掲載ページを、(Bay-p.) はバイスンの著作 [Baysun 1943] における掲載ページをそれぞれ示している。

1922.1 (?) 付 エンヴェル (セクセンケベ⁸⁾) からアミール・アーリム・ハーン
(カーブル) へ (Y-No. 149)

「権威ある強力なわが兄弟、尊敬する王陛下
5月10日付けの高貴なるお言葉、拝受致しました。信仰の義務の証しであるお申し出を受け入れ、神の御名を高めるお許しを [与えられ]、行動を開始しました。ドゥシャンベから出たロシア人たちを追跡し、モルテベ、ショラブ、ネヴァバード・ノダ、セシュメ、サルアスヤ、アンバルサイ-ヤル、ミルシャディにおいてロシア人たちを攻撃しました。そのうち50人以上が死にました。同数が怪我を負いました。馬車と馬が我々の手に落ちました。イブラヒム・ベイは我々の背後から [一語不明] を捕らえました。しかしアンバルサイとその後の戦いには彼は加わりませんでした。現在高貴なる従者たちはすべてジハードのために努力しています。アブドゥルジェッパールおよびダニアル両ベイはシェフリセブズ、グザル、カルシ方面において戦いを続けております。ロシア人たちはシェフリセブズ、グザル、カルシに留まっています。それらの町から出られぬ状態です。

バイスンも包囲されています。コンガレヴたちはポリシェヴィキ軍をカカイトゥで包囲しており、我々は現在イシャー・スルタンとアリー・メルダーン、エシカーガスとダムッラ・オグンヴェルディの軍とともにセクセンケベにおります。ドシュネリ・エミール、アフール、ラフマーン・ビンバシュも軍とともに我々のもとにおります。イブラヒム・ベイは軍を率いてヒサル州へ戻りました。しかしながら我々は彼に手紙を書きました。彼の今後には期待できます。彼のもとにはわずか50丁の銃があるのみです。彼は脅迫によって貧者から金銭、馬、

8) セクセンケベの間違いであろう。

「一語不明」を集めています。しかし、願わくば、これらを止め、崇高な熱意をもって活動を行いますように。現在までに行われた戦いにおいて敵を前にして力を示してきた者たちの名を、我々に知らせるよう同行の従者にご命令くださいますよう。 草稿」

ここではエンヴェルはあたかもブハラ・アミールに忠誠を誓うかのような態度を見せている。ちなみに手紙の中で言及されているイシャー・スルタンとは、ダルヴェズ地方で病氣癒しなどの奇跡によって当時大きな権威をもっていたといわれるスーフィーで、ブハラ・アミールに従っていた人物である⁹。

しかしエンヴェルはこのブハラ・アミールの排除に熱意を燃やしたジャディードのひとり、オスマン・ホジャとも連絡を取っていたことは先にも述べた通りで、例えば以下のような書簡をすでにカーブルに逃れていたオスマン・ホジャに送っている。

1922.3.29付 エンヴェル（バイスン、プルハキヤン）からオスマン・ホジャ（アフガニスタン）へ（Bay-pp. 82-84）

「忠義なる尊敬するムジャーヒド！

サミ・ベイの手紙からカーブルでの貴殿の活動の情報を受け取った。あなたの忠義により始まった運動は、神に栄光あれ、前進している。一方ではブハラの真の祖国軍は感謝しており、一方ではまた祖国は自らの力で外来者の圧力から解放されている。現在私は自らの軍と共にバイスン近郊にいる。各地の軍もこれに加わっている。イブラヒム・ベイを味方にした。彼は現在たいへん努力している。私はといえば、人民の感情に合わせた運動とはただ彼らのこの祖国を救済すること、人員を正しく導くことだということから、わが兄弟ジェナブ・アリーが司令官の代理人として運営にあたるという申し出を受け入れ、その形で運営を行っている。私は、近く当地においてあなたとともに活動する可能性も増していると期待している。ただ神があなたに執着するあまり我々を引き離しませぬよう。敬具。イシャー・スルタンがあなたに感謝の手紙を書いたそうだ。しかし、手紙の上部に、ハナバードにて、オスマン・エフェンディ殿と書かれていたので、わがほうのユズバシュ「百人長」オスマン・エフェンディと推測され、戻って来てしまった。いかなる時もあなたを賛美しつつ。

バイスン、プルハキヤン本営
1922年3月29日 エンヴェル」

一方、フェルガナのバスマチ運動の指導者であったシルマド・ベクとの間には次のようなやりとりがあった。

1922.2付 エンヴェル（プルハキヤン）からシルマド・ベク（ゲルババ）へ（Bād-p. 382）

「尊敬する忠義なるムジャーヒド、わが友、

アッラーの神のご加護により、我々は信仰の敵ポリシェヴィキをドウシャンベ、ユルジ、セリアシアブ、ディフネヴ、カバディアン町の町から追放した。ドウシャンベおよびカバディアンその他の町を敵は戦闘なしに解放した。ポリシェヴィキ

9) イシャー・スルタンについては Кисляков [1938] および帯谷 [1995] を参照されたい。

軍の主力はバイスの守備隊駐屯地にある。これに対してダルヴァズ、パバダア、ディフネヴ、カラダア、ジリギョルの軍から成る我が軍はバイスを包囲している。この町では戦闘が継続している。

願わくば、近々この町も奪回されんことを。アッラーの道において、我々の行う聖戦の成果を得るためには、自覚的にかつ情報をもって一体となって戦う必要がある。そのため、この統一に我々各自が貢献するべく、バイス近郊において開催を希望している民族協定会議 Misâk-ı Millî Kongresi / Misâk-ı Millî Kurultayı にあなたのご出席を願いたい。あなた個人の来訪が可能であるとお考えでないなら、この会議においてあなたの代理として情報をもっているあなたの司令官たちのうち何名かを参加させていただくことがぜひとも必要である。あなたからの協力を得て活動することはアッラーからのご助力である。永遠に神にお委ねする。

1922年2月 カリフの娘婿 エンヴェル」

1922.3 エンヴェル（カーフィルン）からシルマド・ベクへ（Bâd-pp. 383-385）

「尊敬するムジャーヒド！

- 1) ドウシャンベとカバディアンは敵から奪回された。これらの町を明け渡した敵はテルメズとバイスの守備隊駐屯地に避難している。
- 2) わが陣営にいるムジャーヒドたちとともにバイス守備隊駐屯地を包囲した。日夜敵に圧力をかけている。
- 3) 諸君の祖国を敵から救うための最初の活動を取りまとめている。ムジャーヒドたちが互いに信用すること、従うこと、互いの考えを尊重しなければならない。敵の活動についてじかの情報を得ることによって、祖国のどの地においても、諸君が支援を得たならそこにあるもので敵に対抗する軍を形成することが必要である。それゆえ、諸君は同じ祖国をもつ子らである以上、不和不一致を取り除き、一つ旗のもとに集結し、ひとつの理想に奉仕することを要請する。
- 4) 尊敬する愛国のムジャーヒドたちよ！ 諸君に対立している敵の軍は諸君の土地においては外来者である。彼らの補給の中心は遠くにある。それゆえ彼らは諸君の土地の食糧で自らを維持している。諸君の第一の義務は、諸君のいる場所の周辺において敵の補給路を断つことである。この問題においては特に注意深くななければならない。人民の側から敵に食糧を売ったりあるいは施しをしたり、敵のために馬・ロバその他の交通手段を与えたりすることは絶対に阻止すること。
- 5) 敵側の食糧確保に対しては、派遣部隊を攻撃したり、あるいは適当な場所で待ち伏せをして常に邪魔だてする方法によって、阻止するよう努力すること。
- 6) 敵は駐屯部隊の強化のため、ある町から別の町へ、あるいはモスクワから兵を派遣し、ポリシェヴィキ軍を増大させらるだろう、鉄道・道路・橋を常に掌握して、彼らの動きを情報操作により破壊し、敵の活動を脆弱化させるよう努力すること。
- 7) 各レシュケルバシュ [地区司令官] は郵便組織を作り、近隣のレシュケルバシュの状況について情報を得、必要なら支援を送り、あるいは望ましい方法を創出せよ。15日ごとに各司令官は情勢を大本営 karargâh-ı umûmiye / umumî karargâh (総司令本部：カーフィルン) に知らせよ。
- 8) 大本営はバイス市近郊カーフィルン村に設置される。
- 9) 1922年4月10日に行われる会議に出席するためのあなたの使者を派遣されるよう要請する。

1922年3月 ブハラ・イスラーム・ムジャヒディーン司令官
カリフの娘婿 エンヴェル」

これらに対するシルマド・ベクからの返書と思われるのが以下のものである。

1922 (?) シルマド・ベクからエンヴェルへ (Bâd-pp. 385-386)

「エンヴェル・パシャ閣下殿

バイスン市を包囲し、戦っておられるとのこと、ありがたく存じました。我々にあなたが送られた書簡はたいへん喜ばしい効果をもたらしました。我々はこの書簡を近隣のわがレシュケルバシュたちに送りました。

ロシア人たちに対抗してフェルガナ地方において我軍が戦っている一方で、最近我々に対してロシアの大軍が到来し、我々を包囲する目的で各方面から攻撃してくる状況です。

あなたの命令に対し、多勢の軍をもって参上したいと存じました！しかしロシア人たちの攻撃はたいへん強まってきました。この理由により私自身があなたのもとへ参上することはできません。私の代わりにわがコルバシの中から私の兄ルーズイー・ムハンメド・ベクを派遣します。我々のごあいさつを献上し、あなたの命令においてはあなたのご許可あるかぎり心があなたにご奉仕しますよう。

フェルガナ・イスラーム全軍総司令官
ジハンギル・シル・ムハンマド」

これらの手紙で話題となっている民族協定会議の決定は以下のようなものであった。

1922 カーフィルン本営にて招集の会議決定 (Bay-pp. 92-93)

「遠方各地より来た代表と本営にいる全指揮官の参加を得て1922年4月15日大会議が行われた。

この会議にはカーブルにいるアミール・アーリム・ハーンの代理人として送られたジュレ・ホジャ Cure Hoca も出席した。

トルキスタンで行われるであろう革命運動の基本的諸問題が確認された。

会議決定：

- 1) 敵が一掃されている東ブハラ各地においては常設武装軍を創設し、そこに戦時体制を敷く。
- 2) 現在革命が生じている各地へ軍を漸次派遣し、それが人民運動となるよう努める。
- 3) それぞれの地区の革命運動を統括するため、1名のレシュケルバシュを任命する。
- 4) 軍の維持のためザカートとハラージュが十分となるよう計算し、住民の財産から税を徴収する。
- 5) この金銭業務のためザカートチ〔徴税官〕1名を任命する。
- 6) 各地区において敵が一掃されている村においては、村の政府を設立し、行政活動を始動させる。
- 7) レシュケルバシュ、ベイが任命されていない場所においては当方からレシュケルバシュ、ワリー〔副官〕、ザカートチを任命することとし、それぞれ行政が可能な状況となった場所においてはそれらの任命のため長から我々にしかるべき時に通知する。
- 8) レシュケルバシュは軍全体の問題を統括する。ベイは食糧その他の軍備を統括する。そして食糧その他の準備につきレシュケルバシュを補佐する。人民を悪

と抑圧から防衛するとともに、役人であるザカートチは政府に対してザカート徴収の責任を負う。

9) 各地区のレシュケルバシュとベイは各自毎日中央に報告を送る。状況がもっぱら平静であっても、週に2回は報告を送る。

10) 諸地区においては中央から派遣されたヴェキルが司令官の名において公の文書に署名する。

11) 中央司令部から知らせがあつて、互いに近くに位置するレシュケルバシュから敵側からの攻撃を受けていると応援を求めて来た場合、最も近くのレシュケルバシュはただちにできる限り多くの兵力を援助のためその地へに向かわせる。

12) 敵の存在する町や村において敵の兵力が少なければ、夜襲あるいは襲撃によって占拠する。敵の兵力が多ければ、包囲のみを行い、敵を食糧から断絶された状態におき、敵のいる場所を常に監視し、通りかかる敵の分隊に対し攻撃する。

13) 敵の連絡手段である電信・電話線を断つ。

14) 敵のスパイ組織に対しては強行手段を取り、それらを力を罰する。これに対し、我々に奉仕するなら恩赦をもって対処する。

15) 降伏した捕虜に対しては厚遇する。

16) 軍事・政治活動全体の方向はエンヴェル・パシャの責任に委ねられる。

カリフの娘婿、イスラーム軍司令官エンヴェル」

トルクメニスタン方面にはエンヴェルは腹心のアリー・ルザ・ベイ Ali Riza Beyを送り込んでいたが、次のような書簡によってイスラーム世界とシャリーアの防衛のための戦いへの協力を呼びかけている。

1340年第4月24日 エンヴェルからトルクメンの兄弟たちへ (Bay-pp. 133)

「トルクメンのわれらが兄弟たちへ

この書簡をもって、尊敬するわれらが兄弟たちである諸君に宣言する、我々はここ、すなわちドゥシャンベ近郊においてラカイ人 [=ロカイ人]、タジク人、マルカ人、つまり全体として地元ムスリム・ムジャヒディーン軍とともにロシア人を打ちのめしている。神の名誉を [与えたまえ]、善と恩寵によって銃・ライフル・砲弾その他の軍備もロシア人たちのもたら我々の手に落ちた。この我々の書簡により、われらが兄弟である諸君に指示する、イスラーム世界とムハンマドのシャリーアの防衛のため司令官アリー・ルザ・ベイ大佐に諸君から支援の手を差し伸べられんことを、イスラーム全体の安寧の名において希求しつつ。

1340年第4月24日

カリフの娘婿 エンヴェル」

以上から、エンヴェルはトルキスタンにおいて生じていたバスマチ運動の諸勢力を自らの指揮下に置こうとして、ありとあらゆる手段を講じていた様子がうかがえるであろう。エンヴェルの身の処し方は実に巧妙であったといわざるをえない。その立ち回りのうまさによってバスマチたちから受け入れられ、権威を獲得したといってもよいかもしれない。

エンヴェルはイスラーム軍司令官を名乗ったが、同じ時期フェルガナ地方ではシルマド・ベクもイスラーム軍司令官と称してこの地域の反ソヴィエト運動を統率しようとしていたし、またホラズム地方のトルクメン人たちはジュナイド・ハーン Jüneyit Khan (?-1938) を頭にやはり別個に活動を展開していた。従ってエンヴェルがイスラーム軍司令官を自称したのは必ずしも運動全体の合意があつてのことではなかったが、そこに「カリフの娘婿」が加わるならば、おのずとさらなる権威が付加されるのが感じられるであろう。

また一連の書簡等から、彼が「カリフの娘婿」「イスラーム軍司令官」と署名する場合、相手を注意深く選んでいるようにも思われる点は指摘してもよいだろう。例えばブハラ・アミールやオスマン・ホジャに対してはそのような署名は基本的に行われていないようなのである。前者の場合にはアミール自身の権威を不用意におとしめないため、後者の場合には改革主義者ジャディードであるオスマン・ホジャに対して自分がもっぱら「旧体制」の擁護者であるとの印象を与えないためであつただろう。互いに鋭い対立関係にさえある、これら様々なグループをエンヴェル・パシャはとにもかくにも自分に引き付けておこうとしたのである。

各地で同時並行的に展開しながらも、横の連絡が薄く、その内なる多様性のゆえに統合の難しかったバスマチ運動の側からしても、エンヴェルのような外来の、しかもトルキスタンの地域性を超えたカリスマ性のある人物にあえて求心力を求め、それを核として全体としてのまとまりを作りあげるという図式は魅力的だったのかもしれない。

4. おわりに

バスマチ運動の指導者たちは、様々な理由と事情からソヴィエト政権と相容れず行き場を失った人々であつた。行き場を失ったという意味ではエンヴェル・パシャも例外ではない。彼の場合は二重三重の意味で行き場を失っていたと言える。確かにエンヴェルその人の強烈な個性なくしてこのような数奇な運命もなかったであろうが、第一次世界大戦、オスマン朝の崩壊、ロシア革命などが連鎖のように生じ、矛盾と混乱に満ちていた激動の時代という背景もまた考慮に入れねばなるまい。

エンヴェル・パシャはある時はイスラーム世界に張り出した層をつたい、ある時はテュルク世界に張り出した層をつたい、それらの層の間を行きつ戻りつしながら、ある時には改革者・革命家としての、ある時には旧体制の権威を体現する者としての顔を見せながら、ユーラシア大陸を縦横無尽に駆けめぐったかのような印象を受ける。

それらの層を融合させる役割を自らに課したのであろうか。

そして、エンヴェル・パシャの足跡をたどると、その時代の中央アジアが世界情勢の激変の波に洗われていたことにあらためて思いいたる。エンヴェルの存在と彼に関わりをもった様々な人々の様々な反応は、当時の中央アジアの社会的風土を知る手がかりを示しているようにも思えるのである。

【付録1 エンヴェル・パシャおよびバスマチ運動関連の書簡（年代順）】

トルコ語の著作中に引用されている、あるいはトルコの文書館に存在する書簡等を以下に年代順に示しておく。ただし、Yamauchi [1991] 以外においてはそれらの史料の所在、出所が必ずしも明らかでない場合が多いように見受けられる。その他、本稿ではその内容について検討する余裕がなかったものであるが、モスクワの文書館に存在する書簡その他の史料若干についても管見の限りで以下にデータを示しておく。

(РЦХИДНИ=Российский центр хранения и изучения документов новейшей истории;
РГВА=Российский государственный военный архив)

(書簡日付) (差出人・宛先)

- 1921.10.3 イブラヒム・ハヌフ・ベイ (イスタンブル) からエンヴェル (ブハラへの途上) へ (Y-No. 135)
- 1921.10.16 エンヴェル (ブハラ) からキャーミル・ベイ (ベルリン) へ (Y-No. 136)
- 1921.10.29 同上 (Y-No. 137)
- 1921.10.29 同上 (Y-No. 138)
- 1921.10.30 エンヴェル (ブハラ) からC.C.メンバー (ベルリン) へ (Y-No. 139)
- 1921.11.4 エンヴェル (ブハラ) からキャーミル・ベイ (ベルリン) へ (Y-No. 140)
- 1921.11.5 小タラート・ベイ、ハリル・パシャ (バトウーミ) からジェマル・パシャ、リュスタム・ベイ (モスクワ) へ (Y-No. 141)
- 1921.11.11 エンヴェルからオスマン・ホジャへ (Bay-pp. 56-57)
- 1921.11.15 ジェマル・パシャ (モスクワ) からエンヴェル (ブハラ) へ (Y-No. 142)
- 1921.12.23 エンヴェル (ギョクタシュ) からキャーミル・ベイ (ベルリン) へ (Y-No. 143)
- 1921.12-1922.1 (?) バスマチに転じた前ブハラ政府戦争大臣アブドゥルハミド・アリフ・ベクからエンヴェル (?) への提案 (Y-No. 180)
- 1921.1.1 ロシア連邦総領事ナゴルノフからエンヴェル・パシャへの書簡 (フランス語からロシア語への訳) (РЦХИДНИ, f. 62, op. 2, d. 26, l. 1)
- 1921.1.12 エンヴェル・パシャからロシア連邦総領事ナゴルノフへの返書 (フランス語からロシア語への訳) (РЦХИДНИ, f. 62, op. 2, d. 26, l. 2)
- 1922.1.12 ナフィ・ベイ (ブハラ) からジャヴィド・ベイ (アンカラ) へ (Y-No. 144)
- 1922.1.13 ナズィム・ベイ博士 (ソフィア) からキャーミル・ベイ (ベルリン) へ (Y-No. 145)
- 1922.1.14 ロシア連邦総領事ナゴルノフ (ドゥシャンベ) からエンヴェル・パシャへの書簡 (フランス語からロシア語への訳) (РЦХИДНИ, f. 62, op. 2, d. 26, ll. 2-3)
- 1922.1.16 エンヴェル・パシャからロシア連邦総領事ナゴルノフへの返書 (フランス語からロシア語への訳) (РЦХИДНИ, f. 62, op. 2, d. 26, ll. 3-4)
- 1922.1.19 アフメド・ベイ (ベルリン) からエンヴェル (ブハラ) へ (Y-No. 146)
- 1922.1.28 エンヴェル (ドゥシャンベ) からC.C.メンバー (ベルリン) へ (Y-No. 147)
- 1922.1.28 エンヴェル (アフジャル・キシュラク) からキャーミル・ベイ (ベルリン) へ (Y-No. 148)
- 1922.1 (?) エンヴェル (セクセンテペ) からアミール・アーリム・ハーン (カブール) へ (Y-No. 149)
- 1922.2.18 キャーミル・ベイ (グリュエネワルト) からエンヴェル (セクセンテペ) へ (Y-No. 150)

- 1922.2.25 エンヴェル (セクセンテペ・キシュラク) からキャーミル・ベイ (ベルリン) へ (Y-No. 151)
- 1922.2.25 エンヴェル (セクセンテペ・キシュラク) からハリル・ベイ (ローマ?) へ (Y-No. 152)
- 1922.2.25 エンヴェル (セクセンテペ) からアリー・ルザ・ベイ (ケルキ前線) へ (Bay-pp. 117-118)
- 1922.2 エンヴェル (プルハキヤン) からシルマド・ベク (ゲルババ) へ (Bâd-p. 382)
- 1922.3.3 フセイン・イゼット (カラタク) からエンヴェル (プルハキヤン) へ (Y-No. 153)
- 1922.3.4 キャーミル・ベイ (ベルリン) からエンヴェル (プルハキヤン) へ (Y-No. 154)
- 1922.3.8 同上 (Y-No. 155)
- 1922.3.19 エンヴェル (プルハキヤン) からキャーミル・ベイ (ベルリン) へ (Y-No. 156)
- 1922.3.20 エンヴェル (バイスン近郊プルハキヤン・キシュラク) からトルクメニスタンのエミール・レシュケル陸軍大佐代理アリー・ルザ・ベイ (ケルキ?) へ (Bay-pp. 130-131) (Togan-p. 633)
- 1922.3.26 アリ・ナズィフ・ベイ (マゼリ・シェリーフ) からエンヴェル (プルハキヤン) へ (Y-No. 157)
- 1922.3.29 エンヴェル (バイスン、プルハキヤン) からオスマン・ホジャ (アフガニスタン) へ (Bay-pp. 82-84)
- 1922.3.29 エンヴェル (プルハキヤン、バイスン) からトルクメン軍司令官 (アリー・ルザ・ベイ?) (ケルキ?) へ (Bay-pp. 119-121)
- 1922.3.31 在ブハラ・アフガニスタン領事からブハラ共和国外務大臣へ (РЦХИДНИ, f. 62, op. 2, d. 26, l. 22)
- 1922.3 エンヴェル (カーフィルン) からシルメド・ベクへ (Bâd-pp. 383-385)
- 1922.3-4 (?) エンヴェル (カーフィルン) からアマヌッラー・ハーン (カーブル) へ (Y-No. 158)
- 1922.4 (?) シェフリヤル・ベク、スレヤ・ベク (カラテキン) からエンヴェル (プルハキヤン) へ (Y-No. 159)
- 1922.4.3 シェフリヤル・ベイ (?) (ペダン・スルトラル) からエンヴェル (プルハキヤン) へ (Y-No. 160)
- 1922.4.4 エンヴェル (プルハキヤン) からキャーミル・ベイ (ベルリン) へ (Y-No. 161)
- 1922.4.4 エンヴェルからアリー・ルザ・ベイ (ケルキ) へ (Bay-pp. 122-123)
- 1922.4.14 エンヴェル (カーフィルン) からアマヌッラー・ハーン (カーブル) へ (Y-No. 162)
- 1922.4.15 エンヴェル (カーフィルン-バイスン) から西アムダリヤ司令官 (アリー・ルザ・ベイ?) へ (Bay-pp. 124-127)
- 1922.4.18 キャーミル・ベイ (グリューネワルト) からエンヴェル (カーフィルン) へ (Y-No. 163)
- 1922.4.29 オスマン・ホジャからアマヌッラー・ハーンへ (Bay-pp. 137-139)
- 1922.5.6 (バイスン、カーフィルン・キシュラク本営) エンヴェルからジャン・ムハンメド・ハーンに与えられたヤルリク (Bay-pp. 134-135)
- 1922.5.16 エンヴェル (バイスン-カーフィルン本営) からアリー・ルザ・ベイへ (Bay-pp. 128-129)
- 1922.5.17 フザイル・マフドゥム・ベク (タリカン) からエンヴェル (カーフィルン) へ (Y-No. 164)
- 1922.5.25 ハジ・サミ・ベイ (カーブル) からエンヴェル (カーフィルン) へ (Y-No. 165)
- 1922.6.3 ハジ・サミ・ベイ (カーブル) からイリ・ハジ・ベク (カシュガル) へ (Y-No. 166)
- 1922.6.18 小タラート・ベイ (?) (イスタンブル) からズィヤ・ベイ (ベルリン) へ (Y-No. 167)
- 1922.7.2 カバディアン近郊で没収されたアフガニスタン軍事大臣へのエンヴェルの書簡
ロシア語訳写 (РЦХИДНИ, f. 62, op. 2, d. 26, l. 48)
- 1922.7.4 ナズィム・ベイ (ベルリン) からベドリ・ベイ (イスタンブル) へ (Y-No. 168)
- 1922.7.10 ヌリ・パシヤ (ベルリン) からエンヴェル (ドゥシャンベ) へ (Y-No. 169)
- 1922.7.20 ハジ・サミ・ベイ (カーブル) からエンヴェル (?) (アビダレ) へ (Y-No. 170)
- 1922.7.20 ハジ・サミ・ベイ (カーブル) からアリー・ルザ・ベイ (アビダレ?) へ (Y-No. 171)
- 1922.5-6 (?) エンヴェル (カーフィルン) からアマヌッラー・ハーン (カーブル) へ (Y-No. 172)
- 1922.7-8 (?) エンヴェル (ドゥシャンベ戦の最中?) からハジ・サミへ (Bay-p. 116)

- 1922.8-9 (?) エンヴェル・パシヤの聖なる墓におけるハジ・サミの演説 (Y-No. 181)
- 1922.9.14 シュクリュ・ファズイル・ベイ (ベルリン) からエンヴェル (東ブハラ) へ
(Y-No. 173、エンヴェルの死を知らずに書かれたもの)
- 1922.9.18 エンヴェル死後トルキスタン戦線ブハラ部隊特別部より提出されたエンヴェル所持の
文書類の調査結果について (PTBA, f. 272, op. 1, d. 44, ll. 56-67)
- 1922 (?) エンヴェルからオスマン・ホジャ (カーブル) へ、アブドルハミト・アリフ・ベイ
経由で手渡し (Bay-p. 141)
- 1922 カーフィルン本営にて招集の会議決定 (Bay-p. 92)
- 1922 (?) シルメド・ベクからエンヴェルへ (Bâd-pp. 385-386)
- 1339 ブハラ・アミールから東ブハラのバスマチ首領へ (テュルク語からロシア語への訳)
(РЦХИДНИ, f. 62, op. 2, d. 26, ll. 26)
- 1340.4.24 エンヴェルからトルクメンの兄弟たちへ (Bay-pp. 132-133)
- 日付不明 東ブハラの封建領主たちからエンヴェルへ (A-p. 649)
- 日付不明 ブハラ・アミールの叔父からイシャー・スルタン、ダヴレトマンベイへ (テュルク
語からロシア語への訳) (РЦХИДНИ, f. 62, op. 2, d. 26, ll. 21-22)
- 日付不明 ブハラ・アミールの叔父 (アラム・ベク) より (テュルク語からロシア語への訳)
(РЦХИДНИ, f. 62, op. 2, d. 26, l. 23)
- 日付不明 アリー・ルザによるエンヴェルの殉教に関する通知 (A-pp. 690-691)

その他、オスマン・ホジャによるエンヴェル・パシヤの死を悼む詩2編 (Bay-p. 114) がある。

【付録2 地名表記対照表】

本稿で参考にした諸文献はトルコで刊行されたもの、あるいはオスマン・トルコ語の一次史料をもとに書かれたものであり、それらにおいてトルキスタン地方の地名は、著者によってその表記に揺れが見られる側面はあるものの、概してトルコ語式となっている。本稿でもそれらの文献に依拠したがゆえにトルキスタンの地名はさしあたりトルコ語式の発音をカタカナで表記した。これらは現地の発音と若干異なる場合が多く、現地の発音を尊重する立場からは、より現地の発音に近い形で示す必要があり、その表記法についても一定のシステムを確立すべきところである(場合によってはロシア語式にするかウズベク語式にするかタジク語式にするか等によって発音や表記が違ってくるといった問題があり、それがいっそう混乱を招くのだが)。現状ではすべての地名が確定できたわけではないが、さしあたり本稿に登場した地名その他若干につき、現地の発音がトルコ語式よりは反映されていると思われるソ連製地図(ソ連参謀本部作成20万分の1地図、ウズベク共和国、タジク共和国、1987年ほか)で採用されている表記を、確認できた限りで以下に対照表の形で示しておく。本稿中に出てきた地名で地図上で確定できていないものについては「?」を付した。

(カタカナ表記)	(トルコ語式表記)	(ソ連製地図における表記)
アク・ブラク	Ak Bulak	Окбулок
アビデレ、アビデルヤ	Abidere, Âbiderya	Обидара
アンバルサイ・ヤル、アンバルサイ	Anbarsay-yari, Anbarsay	?
イエニ・パザル (=オルジョニキゼアバード)	Yenipazar	Янги-Базар (=Орджоникидзеабат)
イエニ・マザール	Yeni Mezar	?
イフサニエ	İhsaniye	?
ウラチューベ	Ura-Tube	Ура-Тюбе
オルタクズ	Ortayüz	?
カカイトゥ	Kakaytı, Kokaytı	Какайды
カッタ・クルガン	Katta Kurgan	Каттакурган
カッタ・バシ	Katta Baş	?
カバディアン	Kabadiyan, Kabadiyân, Kabadyan	Кабодиён

カフィルニハン	Kâfirnihan	Кафирниган, Кафирнихан
カフィルン	Kâfirun, Kafirun, Kafrûn	Кофрун
カラダア	Karatağ, Karadağ	Каратаг
カラテキン	Karatekin	Каратегин
カラメンディ	Karamendi	Караманди
カルガバザル (カラウルバザル)	Kargapazarı (Karaulpazar)	? (Караулбазар)
カルシ (=ベフブーディー)	Karşı, Karşı (=Behbudi)	Карши (=Бехбудий)
キズイルスウ	Kızılsu	Кызылсу
ギョクタシュ	Göğtaş, Köktaş, Göktaş	Кокташ
キリフ	Kilif	Келиф
キルテシェヒル	Kirteşehir	?
グザル	Guzar, Güzar	Гузар
クリャブ	Külâb, Kulâb, Kulyab	Куляб
クルガン・チュベ	Kurgan-Tübe, Kurgan-Tûbe, Kurgantepe	Курган-тюбе
ケヒテン	Köhiten	Койтен
ケルキ	Kerki	Керки
ゲルババ	Gerbaba	Гарбобо
コシャン	Koşan	?
コルガンテペ (=クルガン・チュベ)	Korgantepe, Kurgantepe	Курган-Тюбе
サトゥルムシュ	Satılmış	?
サルアスヤ	Sariasiya	Сариасия
シェフリセブズ	Şehrisebz	Шахрисабз
シターレ	Sitâre	?
ジュマバザル	Cumapazar	Джумабазар
ショラブ	Şorab	Шураб
シラバード	Şirabâd	Шерабад
ジリギョル	Cilligöl, Yılıggöl	Джиликуль?
ジュルク	Culukkul	Джиликуль
セイラブ	Seirab	Сайроб
セクセンテペ	Seksentepe	?
セシュメ	Seşme	?
セリアシアブ (サルアシアのこと?)	Seriasyap	—
セリアスヤ (サルアシアのこと?)	Seriasya	—
センク・チュベ	Senk-tûbe	?
タシュ	Taş	?
タリカン	Talikan	Таликан
ダルヴァズ	Darvaz	Дарваз
チェガン [・テペ]、チェゲン	Çegan, Çegan, Çegan Tepe, Cegen	?
チッリ・ギョル	Çilli Göl	Джиликуль?
ディフネヴ (=デナウ)	Dihnev, Dehnay	Денау
デルベント	Derbent	Дербент
テルメズ	Tirmiz, Termez	Термез
デレイ・ハーキヤン	Dere-i Hâkiyan	?
トゥガイサル	Tuğaysarı	?
ドゥシャンベ	Döşenbe	Душанбе
ネヴァバード=ノダ	Nevabad-Noda	?
バイスン	Baysun	Байсун
バイラムジ	Bayramcı	?
バシュチャルダク	Başçardak	?
バッサア	Bassağa	?
ハナバード	Hanabâd	Ханабад
ババダア	Babadağ	Бабатаг
バルジェヴァン、ベルジヴァン	Balcevan, Belh-i Cevan	Бальджувон
バルダクチ	Bardakçı	?

ヒサル、ギッサル	Hisar	Гиссар, Хисор
フェイザバド	Feyzabad	Файзабад
ブハラ	Buhara	Бухара
フラタ	Hurata	?
プルハキヤン	Puluhâkiyan, Pul Hâkiyan	Пулихаким
ペダン・スルトラル	Pedan Sırtları	?
マザリ・シェリーフ	Mezar-ı Şerif	Мазари-Шариф
ミルシャディ	Mirşadı	Миршаде
ミルテベ (モルテベのこと?)	Mirtepe (=Mortebe?)	?
ムイン	Muin	?
モルテベ	Mortebe	Мортеппа
ヤヴァン	Yavan	Яван
ユルジ	Yürçi, Yurçi	Юрчи
ライラク	Laylak	?
ラハトゥ	Rahatı	?
リゲル	Rîğır	Регар
レイレカーン	Leylekân	Ляйлякан
レッテベンド	Lettebend	Латтабанд

参考文献

- Aydemir, Ş. S.
1943 *Makedonya'dan Ortaasya'ya Enver Paşa (1914-1922)*, İstanbul.
- Bâdemci, A.
1975 *1917-1934. Türkistan Millî İstiklâl Hareketi ve Enver Paşa*, İstanbul.
- Baysun, A. R.
1934 *Türkistan Millî Hareketler*, İstanbul.
- Кисляков, Н. А.
1938 “Ишан-феодал восточной Бухары,” *Академия Наук СССР: Труды таджикистанской базы*, Т. 9, Душанбе.
- 帯谷知可
1992 「フェルガナにおけるバスマチ運動 1916～1924年—シル・ムハンマド・ベクを中心とした『コルバシュ』たちの反乱—」『ロシア史研究』第51号、15-30頁。
1995 「中央アジアにおけるスーフィズム—バスマチ運動とタリカー—」『講座スラブの世界2 スラブの民族』弘文堂、232-249頁。
- Togan, Z. V.
1969 *Hâtıralar. Türkistan ve Diğer Müslüman Doğu Türklerinin Millî Varlık ve Kültür Mücadeleleri*, İstanbul.
- 山内昌之
1991 *The Green Crescent under the Red Star: Enver Pasha in Soviet Russia 1919-1922*. (Studia Culturae Islamicae No. 42), Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo.
1995a *Hoşnut Olamamış Adam: Enver Paşa Türkiye'den Türkistan'a*, İstanbul.
1995b 「納得しなかった男—エンヴェル・パシャ 中東から中央アジアへ (1)-(12)」『世界』1～12月号。
1999 『納得しなかった男—エンヴェル・パシャ 中東から中央アジアへ』岩波書店。

追記

シンポジウムでの報告をもとに本稿を執筆してから連携研究成果報告書に収められて刊行されるまでに4年以上が経過している。執筆の段階では、本稿のような形でトルキスタンにおけるエ

ンヴェル・パシヤの足取りを整理したり、バスマチ運動に関連する書簡を紹介したりすることにそれなりに意義があると考えていたが、その後1999年に単行本として刊行された山内昌之『納得しなかった男—エンヴェル・パシヤ中東から中央アジアへ』（岩波書店）の第4部、第5部（同名の『世界』における連載には含まれなかった部分）において、それらは本稿よりさらに詳細精緻に述べられている点をお断りしなければならない。エンヴェル・パシヤの足跡についてはこの著書のデータにより補足させていただいた。一部訳出した書簡や引用に同書との重複もあるが、これらは本稿執筆時のままにとどめてある。